



大火直後の三本木町中心街

1941（昭和16）年5月・株式会社田清商店（田中キヨノ氏）所蔵

十和田市の中心街は、かつては水利に乏しい荒涼とした大地であった。藩政末期に新渡戸伝と十次郎親子が、稲生川の上水工事と計画的な町割り形成に着手。これ以後、三本木国営開墾事業などを経て、今では上北地域最大の都市である。青森県内の多くの都市

は、藩政期以来の城下町や港町が、近代以降に継承されてきたものだ。青森・八戸・弘前はその代表格といえよう。しかし、三本木は幕末に藩士が計画的に造り上げた都市という点で異色である。

1941（昭和16）年5月12日、その計画都市を猛烈な大火が襲った。三本木町にとっては、1929（昭

三本木大火

70周年を前に！

中 國 裕

（県民生活文化課

県史編さんグループ

主幹）

和4）年に続く2度目の大火であった。

この時は地元の警防団だけでは消火しきれず、七戸・五戸・八戸・野辺地から警防団が応援に駆けつけた。

青森市からも数時間かけて消防ポンプ車が出動している。この大火で約700戸

の家屋が焼失し、市街地の大半は焦土と化した（写真参照）。

大火の翌日、県当局と東奥日報社は共同で義捐金の募集を開始する。日中戦争が泥沼化し、銃後の徹底が叫ばれる中で、人々の暮らしは決して豊かでなかった。けれども各地から多数の義捐金が寄せられた。その額は町の今年度当初予算に近かったという。

その後、町当局は内務省の要請もあり、都市計画に關する協議会を開催した。既に1939（昭和14）年4月、内務省は三本木都市計画として街路の拡幅を決定していた。

それが大火後の1941（昭和16）年9月には、復旧と将来の災害防止を意図して、さらに街路を拡幅している。大火は都市計画にも大きな影響を与えたのである。

ところが大火から1ヶ月以上経過した6月28日、罹災者たちが町民大会を開催し、復興の促進を決議した。関係者の利害関係が絡み、復興計画が中々進まなかつたからである。そして12月16日、太平洋戦争が勃発してからは、地方都市の復興と発展が難しい情勢となった。それどころか、国内の多くの都市はアメリカ軍から空襲を受けている。

幸いなことに三本木町自体は、ほとんど空襲被害を受けずに敗戦を迎えた。軍馬補充部三本木支部は民間に解放され、都市計画事業によって官庁街へと生まれ変わった。現在の官庁通り界隈は、かつて軍馬補充部の敷地だったところである。

敗戦の衝撃と街並みの変化で、戦前に2度の大火があったことは忘れられがちだ。しかし、大火は町の力の8割を占めるといわれた中心街を壊滅させている。この事実は決して無視できない。2011（平成23）年5月で三本木大火は70周年を迎える。戦争と同様、大火も埋もれさせてはいけない重要な歴史的事実なのである。